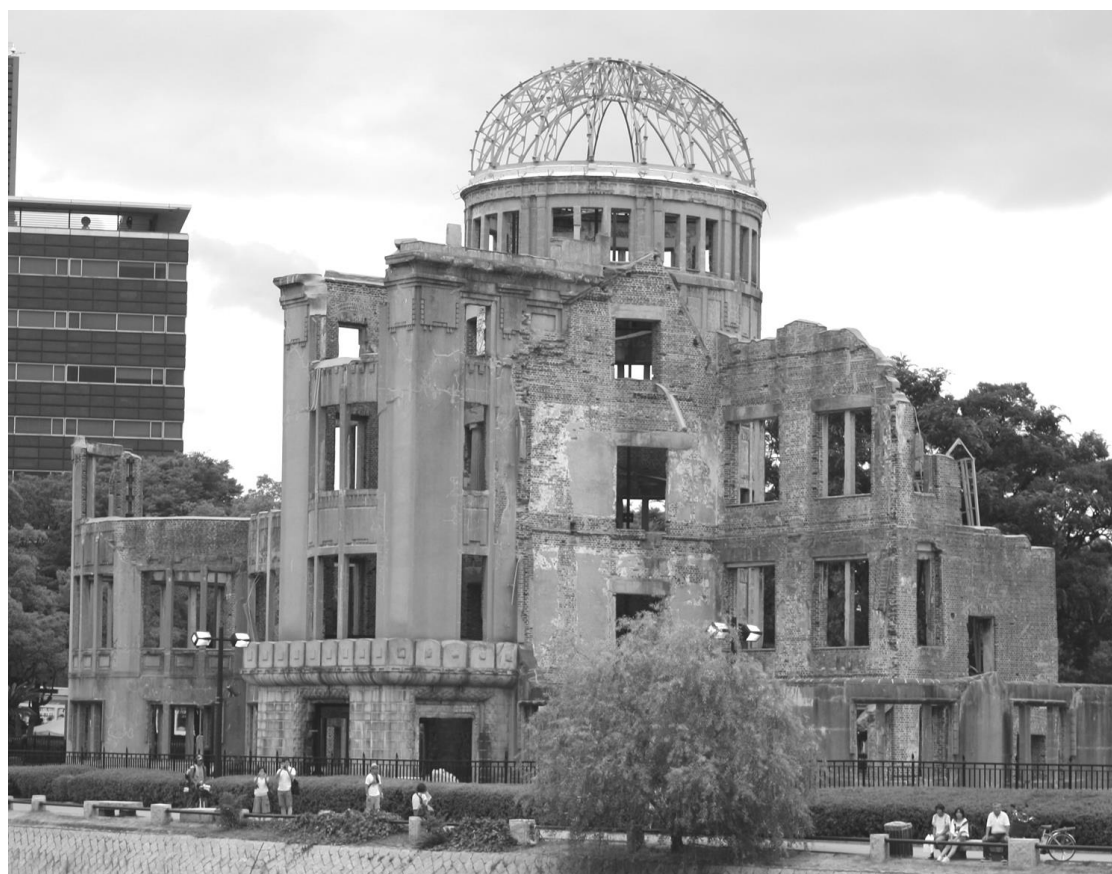


非核平和友好都市宣言推進事業

平成 30 年度 広島平和記念式典参加

# 感想文集



「二度と同じような悲劇が起こらないように」との願いがこめられている原爆ドーム

上 越 市

## 発行に当たって

上越市は、戦後 50 年の節目に当たる平成 7 年に非核平和友好都市を宣言し、豊かな自然と長い歴史に培われた美しい郷土を末永く守るため、核兵器を廃絶し、世界の恒久平和に向けてたゆみない努力を続けることを誓いました。

以来、この宣言の趣旨を普及・啓発するため、毎年 8 月 6 日に行われる広島平和記念式典への参加のほか、平和展の開催や戦争体験談集の発行など様々な事業に取り組んでいます。

今年度も市内中学校の協力のもと、中学生 24 人が広島平和記念式典に参列しました。

この冊子は、広島平和記念式典に参加し、犠牲者に鎮魂の祈りを捧げ、平和の尊さを直に体験されたみなさんの感想文をまとめたものです。

本冊子が平和について考える一助となれば幸いです。

平成 30 年 11 月

上 越 市



## 目次

発行に当たって ..... 1

目次 ..... 2

### 感想文

戦争・核なき世界に向けて

城北中学校 3年 笠原 惇平 ..... 4

恒久平和を願って

城東中学校 3年 林 龍之介 ..... 5

悲しみを繰り返さないために

城西中学校 3年 上原 志喜 ..... 6

平和な未来をつくるために

雄志中学校 3年 西嶋 一之佑 ..... 7

世界で唯一の被爆国 日本

八千浦中学校 3年 伊倉 ころろ ..... 8

失敗を失敗で終わらせない

直江津中学校 3年 高原 碧波 ..... 9

広島平和記念式典派遣で学んだこと

直江津東中学校 3年 小出 紬 ..... 10

終戦から73年

春日中学校 3年 小川 悠河 ..... 11

「戦争」について考える

潮陵中学校 3年 竹内 広修 ..... 12

広島派遣で学び、感じたこと

安塚中学校 3年 北島 結子 ..... 13

未来へ

浦川原中学校 3年 石田 未知花 ..... 14

世界の「平和」のために

大島中学校 3年 佐藤 茅弥 ..... 15

広島へ行って						
牧 中 学 校	3年	横尾	花菜	.....	16	
核なき世界へ						
柿 崎 中 学 校	3年	柳澤	勇翔	.....	17	
広島平和記念式典に参加して						
大 湊 町 中 学 校	3年	内 田	篤	.....	18	
私が伝えたいこと						
頸 城 中 学 校	3年	唐澤	良多	.....	19	
広島平和記念式典を通して						
吉 川 中 学 校	3年	上 野	頼生	.....	20	
核廃絶を目指して						
中 郷 中 学 校	1年	林	真生	.....	21	
平和な未来のために						
板 倉 中 学 校	3年	佐藤	結羽	.....	22	
現場で感じて学んだこと						
清 里 中 学 校	2年	丸 山	奈央	.....	23	
広島体験学習より						
三 和 中 学 校	3年	高 嶋	泰地	.....	24	
この世界に生まれて						
名 立 中 学 校	3年	高 宮	茉優	.....	25	
平和になるために						
上越教育大学附属中学校	2年	横尾	美々	.....	26	
広島派遣を通じて考えたこと						
直江津中等教育学校	2年	丸 田	真	.....	27	
非核平和友好都市宣言文				.....	28	

# 戦争・核なき世界に向けて

城北中学校 3年 笠原 惇平

今年の8月6日は偶然にも73年前と同じ月曜日でした。快晴の空のもと、広島平和記念公園にはたくさんの方が訪れていました。外国人の方もたくさんおり、世界でも平和について考えられてきているのだなと実感しました。

広島平和記念資料館で、8時15分で止まった時計や熱線によって変形したガラス瓶、黒焦げになった三輪車や弁当箱などの原爆の威力を物語る遺品を見て、ショックを受けるとともに、核兵器の恐ろしさを改めて実感しました。

さらに、広島国際会議場では高校生が被爆者の方の話を聞いて原爆投下直後の広島の様子を描いた「原爆の絵」を見させていただきました。川を埋め尽くす死体や全身をやけどした人々、助けたくても助けることができない様子や当時の人々の心情が分かり、とても心が苦しくなりました。

昨年7月に国連において採択された核兵器禁止条約。条約の成立に貢献したICANがノーベル平和賞を受賞し、被爆者の思いが世界に広まりつつあります。しかし、今、世界では自国第一主義が台頭し、核兵器のさらなる開発が進められ、各国間で緊張が高まってきているように感じます。私は、人々、地球からあらゆるものを奪う核兵器は必要がないと思います。私たちが核兵器、そして戦争について深く学ぶことは、この世から核兵器や戦争を無くすことの第一歩であると思います。

原爆投下から73年の月日がたち、被爆者の方の高齢化が進み、体験談を聞く機会も減ってきています。これからは私たちが次の世代に核兵器や戦争のことについて語り継いでいかなければなりません。私は、今回学んだことを周りの人にしっかりと伝えていきたいと思います。そして、核兵器や戦争のない世界になることを祈ります。

最後に貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

# 恒久平和を願って

城東中学校 3年 林 龍之介

私はもともと、戦争ということにはあまり興味がありませんでした。以前の私は戦争の話は退屈だと思っていて、「また、この手の話しか」と他人事としていました。そんな認識を塗り替えたのが、今回の平和記念式典参加のための広島への訪問でした。広島への訪問は、今の私に影響を与えてくれたと思います。

73年前、8月6日の広島で原爆がさく裂しました。街には熱線が降り注ぎ、人々は焼かれ、鉄は蠟ろうのように溶け、その爆発は遠くからは太陽のような火球が街を覆っているように見えたとのことで、この世の終わりのような光景だったそうです。原爆の被害はそれだけにとどまらず、放射線による二次被害によってたくさんの人々が今も苦しめられています。そんな状況から復興を果たしている広島ですが、被爆した建物などが多く残されていて、今でも私たちに戦争・核爆弾の悲惨さを伝えています。その中で、私の心に強く残っているのは袋町小学校平和資料館の壁です。壁には被爆した人々の伝言が残されています。壁面には自分の安否を伝えるものや、行方が分からない妹の安否を心配し、妹の特徴を書き記した兄の伝言などが記されています。その全てが生々しく、当時のままで校舎が保存されていることもあり、73年前の様子がありありと伝わってきます。教科書の中や様々なメディアが伝える戦争というものをバーチャル的な感覚としてとらえていましたが、その壁はまさにリアルそのものであって、実際にこの場所で核が使用され、多くの人々が亡くなったという戦争の恐ろしさや悲惨さを物語っています。

しかし、その後の広島での灯ろう流しに参加したところ、この被爆体験や核の恐ろしさを伝えるはずのものがどんどん風化しているように感じてしまいました。灯ろう流しでは、慰霊目的よりもお祭りのような雰囲気や垣間見え、観光目的に参加しているような雰囲気もあり、これでは本来の趣旨が薄れてしまうような気がしてしまいます。

現在、ご健在の被爆体験者の皆さんが減少し、当時の様子を伝える人々は減る一方です。核の被害の恐ろしさや戦争の悲惨さを次の世代に受け継ぐ機会がどんどん失われていきそうです。

このように核や戦争の悲惨さを受け継ぎ、さらに次の世代へと渡し、平和な世界を築き上げねばならない私たちは、まず小さなことから始めなければなりません。私たちのような戦争を知らない者たちが戦争や平和について知ろうとすることから始め、みんなで考え、一歩ずつ進むしかないと思います。そして、世界で唯一の被爆国である日本が兵器の非核化に向けてリーダーシップをとることができない現状を打破し、日本が世界の恒久平和をリードする必要を感じました。

# 悲しみを繰り返さないために

城西中学校 3年 上原 志喜

僕は「戦争をしてはならない」という気持ちをより強固なものにするため、広島へ行きました。

1945年8月6日午前8時15分、広島に原爆が投下され、広島は悲しみと絶望が支配する世界になりました。

僕は初めて広島に行き、原爆ドームや広島平和記念資料館を見学してきました。

その中で僕が一番印象に残っているものは、基町高校の美術部の方々が描いた絵です。これは、被爆者の体験を基に描いたもので、僕には当時の様子や苦しみなどがよく伝わってきました。一瞬のうちに亡くなった方もいれば、家の下敷きになって長い時間苦しみながら亡くなった方もいます。

罪のない人々が、何の抵抗もできず亡くなってしまったと思うと、とても胸が苦しくなります。

僕がこの3日間で「戦争・原爆の恐ろしさ」、「平和がどれほど大切か」など、たくさんのことについて学び、戦争ほど残酷なものはなく、平和ほど尊いものはないと、気持ちを強くすることができました。

「戦争があった」という事実は変わりません。しかし、これから大切なのは、「戦争をなくすにはどうすればいいか」ということです。年々戦争を体験した方が少なくなっているのが現状です。だから、一人ひとりが戦争のことについて十分に理解し、次の世代に語り継ぐことが必要だと思います。

二度と戦争を起こさず、戦争によって悲しむ人々がいなくなるように、僕は、今いる場所でお互いを認め合い、人と人が手を取りあっていけるようにしていきます。それが、世界平和への第一歩だと思います。

# 平和な未来をつくるために

雄志中学校 3年 西嶋 一之佑

世界で初めて原子爆弾が落とされた広島。その日は快晴で、すがすがしい朝だったそうです。

原爆投下から73年の時が過ぎ、今の広島は路面電車が通り、高層ビルが建ち並んでいて、都会という感じがしました。73年でここまで復興できたのは、数え切れない人々の努力があったからだと思います。

その街を派遣中学生として訪れて、いくつか印象に残ったことがあります。

一つ目は、広島平和記念式典に参加したときのことです。僕はたくさんの人々のスピーチを聞きました。その中で、「平和とは、自然に笑顔になれること。平和とは、人も自分も幸せであること。平和とは、夢や希望を持てる未来があること。」という言葉に感動しました。この言葉を聞いて、今まで僕の中で漠然としていた平和というものは形にできるものだという事に気づきました。そして平和をつくることは決して難しいことではなく、一人ひとりが平和を願うことでつくることができるものだという事を感じました。

二つ目は、広島平和記念資料館に行ったときの事です。そこでは、原子爆弾が広島を一瞬で破壊する様子をシミュレーション映像で見ることができました。その映像を見て、核兵器の恐ろしさを知り、絶対に存在してはならないものだと思います。しかし、この世界には、多くの核兵器が存在しています。日本は唯一の被爆国です。だからこそ、核兵器のない世界をつくる先頭に立たなければいけないと僕は思います。

平和な未来をつくる、そのためには一人ひとりが平和を願い、すべての国が核兵器を持たないことが必要だと思います。だから僕は、平和を願う一人として核兵器のむごさと罪深さを多くの人に伝え、平和の輪を広げていきたいです。



# 世界で唯一の被爆国 日本

八千浦中学校 3年 伊倉 ころろ

私は今年の夏休みに、広島平和記念式典派遣事業に参加しました。今回学んだことを、一人でも多くの人に知ってもらえたらと思います。

広島に行く前に、私は毎日のように耳に入ってくる戦争の話題について、「昔は大変だった」「戦争はしない方がいい」という浅い考えで、人ごとのように思っていました。しかし、広島で原爆による被害を目の当たりにして私は大きな衝撃を受け、戦争について調べてみようと思いました。そこで思い浮かんだのは、大阪に住む私の曾祖母のことでした。今まで、曾祖母から戦争についてたくさん話を聞いていました。曾祖母は戦争の時代に育ったことや、買い物のために地元を離れて帰宅すると爆弾を投下されて家が焼け野原になっていたことなど、辛い体験談を語ってくれました。もし爆弾が投下されたときに曾祖母が家の中にいたら、おそらく曾祖母は亡くなっていて、私は生まれていなかったことになります。このことを考えただけでぞっとします。また、戦時中に八千浦中学校の学区にも爆弾が投下されたことがあり、同じような体験をしている人が私の家の近所にもいると思います。

広島平和記念資料館を訪れて目にしたのは、焼けこげた服や弁当箱、自転車などでした。原子爆弾は一瞬にして大切な家族、人々の未来を焼き尽くしてしまいました。

8月6日の朝、広島で原子爆弾が爆発した瞬間、爆心地における温度は約3,000℃～4,000℃、風速は秒速440mで、強い台風の中心風速の約10倍だったそうですが、とても想像が付きません。そして空がピカッと光った瞬間、自分の体にガラスが突き刺さり、腕や足が吹き飛ばされるなどして、一瞬にして数万人の尊い命が奪われました。現在でも原爆による後遺症で苦しんでいる人がたくさんいます。

現在、戦争をしている国は、世界194か国中、45か国もあるそうです。今、私たちがこうして普通に生活している間、どこかの国や地域で人が人を殺し、人が人に殺されているのです。私はこの時代に生まれて幸せで平和に過ごしていますが、この「幸せ」と「平和」を未来につなげていくには、一人でも多くの人に戦争の悲惨さを知ってもらう必要があると思います。今の世界を変えるために、そして二度と戦争をしないために。

# 失敗を失敗で終わらせない

直江津中学校 3年 高原 碧波

たった一つの爆弾が、数えきれない程のものを奪った。原爆の投下。一番してはいけなかった人類最大の失敗だと思う。

実際に広島へ足を運び、驚くことや、伝わってくるものが多くあった。

初めて実物の原爆ドームを見た。堅いコンクリートの建物なのに、ボロボロになっていた。鉄骨がむき出しになっているところもあり、原爆の威力がその姿から伝わってきた。

当時の爆心地にも足を運んだ。そこには、原爆の被害でザラザラの石の表面がガラスのようにツルツルになった像が、当時のまま置かれていた。3,000℃～4,000℃の世界を想像し、原爆の威力に恐怖を覚えた。

石をも溶かす程の原爆は、今日までに31万4,108名の命を奪った。その数を聞いて驚いた。この31万4,108人の人たちの命は、原爆がこの世になれば、繋ぐことができた命なのではないか。そう思うと、悔しくて、悲しくてたまらなかった。

広島平和記念資料館は、原爆の仕組みから被害者の遺留品など、様々な資料が展示されていた。物は違っても、見ていて伝わってくるものは同じような気がした。「二度と繰り返さないで」、「核兵器をなくして」、「手を取り合って、世界平和の実現を」そう訴えているようだった。

そして、被爆者への聞き取りを基に高校生が描いた絵「あの日」を見た。どの作品も、今にも動き出しそうなくらい臨場感があり、ヒロシマの人々の苦しみを物語っていた。切なさと共に「もし、自分だったら」という想像が私を襲った。火の中で母を呼ぶ子、真っ黒な身体の父親、無数の死体が浮いた川。今では想像できない光景の数々。どれほど恐ろしく、苦しかったことだろう。

どうしてこんなことが起こってしまったのだろう。「戦争はおかしい」、「やめろ」と訴えていた人もいたのに。罪のない人たちが、一瞬で命を奪われ、人々の未来は真っ黒になった。

今もなお、同じことを起こす可能性のある道具が世界にある。確実になくしてほしい。世界平和は、そんなに難しいことではないと思う。

命があり、友達がいて、勉強ができる、家族と過ごすことができる日々を「普通」と呼んではいけないと思った。一日一日を大切に生きていこうと心に決めた。そして、この過ちをくり返さないために、核兵器を、戦争をなくさなければならないと考える。そして、世界中の人々が平和と人類を愛し、手を取り合って進んでいかなければならない。それができた時、ヒロシマの人々、世界の人々が長い間待ち続けた願いが叶うだろう。

そのためにも、私は平和への思いを語り、伝えていく。

# 広島平和記念式典派遣で学んだこと

直江津東中学校 3年 小出 紬

私は、8月5日から7日にかけて、広島平和記念式典派遣事業に直江津東中学校の代表として参加しました。原爆ドームや広島平和記念資料館を見たのは初めてでした。だから、当時の悲惨な様子にとにかく驚きました。ほかの建物が原爆投下で消滅する中、当時の状態のまま残っている原爆ドームは、原爆の恐ろしさを伝えるためになくてはならない存在だと思いました。

家が焼けて家族とも離れ、自分の居場所がない人、原爆の被害によって皮膚がなくなり骨だけが残った人、体中にやけどを負って水を求める人、水を飲んだら安心して死んでしまった人など、原爆投下直後はこのような人たちが数えきれないほどいたのです。

現在の世界ではこのような光景など考えられません。原爆の被害に遭った当時の人たちが、どのような気持ちで一日一日を過ごしてきたのだろうと考えると苦しくなります。一つの原爆でこんなに多くの人が亡くなってしまったのだと、原爆の恐ろしさもあらためて実感しました。

しかし、現在の広島は建物がたくさんあり、木々も青々と繁っていて、73年前に原爆が投下されたということを感じることはできません。70年は草木が生えないと言われていましたが、いち早く芽を出し咲いた<sup>きょうちくとう</sup>夾竹桃の花に多くの人々が希望や期待を持ち、復興に向けて努力をしてきたのだと思います。

私はそのような人たちが中心となって、今日のような平和な世界を築いてきたということを当たり前だと思わず、感謝して毎日を過ごさなければならないと思います。

戦争を経験した人もどんどん減っています。戦争があったことは、決して忘れてはいけないことです。だからこそ、私たちが学んだことを周りの人や今後に伝えていかなければならないと思います。その場所を訪れ、現実を知り、この事実を受け継いでいくことが大切なのだと思います。

私は、平和があることの大切さを、今回の広島派遣で学びました。学んで終わりにすることなく、たくさんの人たちにそれを伝えていきたいと思います。

# 終戦から73年

春日中学校 3年 小川 悠河

私は8月5日から2泊3日で広島平和記念式典に参加してきました。今まで終戦から73年というようなテレビ番組や社会の授業で、当時の様子などを学習してきました。

しかし、実際に原子爆弾が落とされた場所に行くと、テレビや授業よりも何倍も感じるものがありました。

まずは、広島市全体として戦争・核に反対していることが風景として伝わってきました。2歳の時に被爆し、白血病を発症し12歳で亡くなった佐々木禎子さんを忘れないように作られた原爆の子の像。被爆し、わずかに外壁などが残った原爆ドーム。原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを伝える象徴として、今も多くのことを私たちに教えてくれます。見ただけでも心が痛むようなものですが、この現実から目をそらさずに二度と人間が同じ間違いをすることがないように、私もできることからしていきたいです。私が今できることは、実際にどう感じたのかを友人や家族に伝えることだと思い、この感想を書いています。

もう一つ、広島平和記念公園を歩いていて気付いたことは、様々な国の方々が訪れているということです。外国の方はこの平和記念式典に参加し、どのように感じたのでしょうか。アメリカの方はどう感じたのでしょうか。自分達の国が落とした原爆によって多くの死者を出し、一瞬にして街を破壊した国の人としてどう感じていたのでしょうか。やはり、戦争・核はこの世からなくすべきと考えたのか。当時は、大変な世の中だからしょうがないと考えたのか。私は前者であってほしいですし、日本も唯一の被爆国として、もっと核廃止を呼びかけていくべきだと思います。

私はこの体験を無駄にしないよう、感じたことを多くの人に伝え、これからの平和な世界のために貢献していきます。

# 「戦争」について考える

潮陵中学校 3年 竹内 広修

今回の広島派遣では、原爆の痕跡が残されたぼろぼろの原爆ドームや、高校生の書いた生々しい絵を見て、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さを体で感じとることができました。その経験から、僕は「戦争」について自分なりに考えてみました。

まず、「戦争はなぜ起こるのか」についてですが、これは一概に言えないものだと思います。例を挙げると、宗教上の対立によるもの、領土拡大のため、戦争が起こると一部の人が儲かるからなどがあると思います。しかし、僕が思う理由は「僕たちが人間だから」ではないかと思いません。なぜなら、核兵器をつくってしまうのも人間ですし、人間というのは、怒りや悲しみ、嫉妬などの感情を忘れることのできない、欲深い生き物だと思うからです。

そして、それを踏まえて僕は「戦争をなくすにはどうしたらよいか」について考えました。

極端な話かもしれませんが、僕は兄弟・親子喧嘩、学校でのいじめ、パワハラなども、人々の争い、つまり小さな戦争といえると思います。今回の広島平和記念式典では、「隣の家との関係を保つために爆弾をしかける。これは間違っている。」という例え話がありましたが、何か問題が起こった場合、武力で解決しようとするのは正しいとは言えません。自分の正義を押し通すだけではだめなのです。つまり、戦争をなくすためには、信頼のできる相手を、たくさん作ることが重要だと僕は思います。怒りなどの感情も信頼できる相手なら抑えられるかもしれませんし、広島の場合も、もしアメリカ兵と広島の人が誰か一人でも友達だったら原爆は落とされなかったのかもしれない。

世界中の人たちが相手をきちんと認め、信頼し合っていけば、戦争はもう二度と起こらないと僕は信じます。世界平和の実現に向けて、これからも戦争について追究していきます。

# 広島派遣で学び、感じたこと

安塚中学校 3年 北島 結子

1945年8月6日、午前8時15分。

広島に原子爆弾が投下されました。私たちは、この日から73年の月日が経った広島に派遣で訪れました。

行きのバスの中で、はだしのゲンのDVDを見て、広島で起こったことを映像で詳しく知ることができました。自分がもしゲンだったら、この状況に耐えきれないですし、身動きすらできなかつたと思います。それに比べてゲンは、小学生にも関わらず、家族や周りの人のために一生懸命強く生きていました。私は、この姿に感動しました。原爆が投下された後の広島の様子は、街並みは崩壊し、焼け焦げた遺体、溶けた皮膚をぶら下げながら歩いている人、水を求め呻<sup>うめ</sup>いている人、熱さのあまり川に身をなげる人など悲惨な光景ばかりで埋めつくされていたことが映像から分かりました。

実際に広島を訪れると、当たり前なことですが、そのような光景は一切感じられませんでした。このとき、「平和」なのだと思います。しかし、広島平和記念式典や献花・献水慰霊式への参列、平和記念公園内ガイドツアーへの参加、平和記念資料館や袋町小学校平和資料館の見学など、多くの場所を訪れたことで、本当に原爆投下が存在し、広島中が苦しみ、悲惨な光景に包まれていたことをあらためて感じさせられました。このような感情は現地へ行ったからこそ生まれたのだと思います。さらに、灯ろう流しに参加したことで、戦争を再び起こしてはならないと強い気持ちを抱くことができました。

私は、広島を訪れたことで、平和の大切さについてあらためて学んだこと、感じたこと、考えたことがたくさんありました。また、平和への思いも変わりました。実際に広島へ行ったことを通して、戦争を再び起こしてはならないことを自分の心に刻み、さらに、周りの人にも伝えていくことを誓います。

# 未来へ

浦川原中学校 3年 石田 未知花

「平和」って習ったことあったっけ。

原爆ドームの前に立って、私が最初に思ったことです。テレビや教科書で何度も見たはずの原爆ドームですが、何とも言えないその迫力に圧倒されました。むき出しになった鉄骨、バラバラになり飛び散ったコンクリート。一瞬のうちにこれだけ破壊してしまう原爆の恐ろしさに、私は言葉を失いました。

広島平和記念資料館では、戦争の悲惨な状況を目の当たりにしました。8時15分で止まったままの時計、血だらけになった子供の服、辺り一面が火の海になった時の様子を描いた絵。見る物全て、目をそらしたくなりました。そんな中、私の目に留まった写真、「焦土に咲いたカンナの花」。戦後70年間は草木も生えないと言われていた広島で、新しい命が芽吹いた写真でした。辛い状況の中で苦しんでいた人々は、この新芽を見て、自分も未来に向かって命をつなげようと力を振りしぼったのではないかと思います。

戦後73年、平成最後の夏。15歳になる直前の私が初めて訪れた広島は、原爆ドーム以外は、戦争の面影などほとんど感じないほど発展した街でした。平和な街を取り戻したいという思いで努力してきた、広島の人々の気持ちが伝わってくるようでした。

ところで、私は広島平和記念式典に参加し、驚いたことがあります。それは、日本だけでなく、世界各国からもたくさんの方々が式典に参加していたことです。一般の方々があんなに参加しているとは知らず、とても驚きました。同時に世界で唯一の被爆国として世界中のたくさんの方々が注目し、式典に参加しているのだと思いました。

私にとって平和とは、人間同士が傷つけ合わない世界になることです。そのために、未来をつくっていく私たちがしなければならないことはたくさんあるはずです。私はまず、今回広島を訪れて学んだ、本当の戦争の姿、悲惨さ、そして平和の大切さを周りの人に伝えていきます。

それが、世界の平和につながることを信じて。

# 世界の「平和」のために

大島中学校 3年 佐藤 茅弥

「平和」とは何でしょう？みんなが楽しく毎日を過ごせること。安心して暮らしていけること。その他にも、みなさん一人ひとりが思う「平和」があると思います。現在、日本は平和だと思いますか？おそらく、日本に住んでいる人達のほとんどが、現在は平和だと答えるでしょう。私も平和だと思います。そんな平和な日本にも、かつて平和でない、私達には考えられないほど悲惨な時代があったのです。

73年前の8月6日午前8時15分、原爆は落とされました。とてもまぶしい光とともに、人を蒸発させるほどの熱線、大きな建物が一瞬にして壊れるほどの衝撃波。広島は地獄になりました。ちょうどその日は建物疎開をするために、町の人々がたくさん集まっていたそうです。集まっていた人達はほとんど即死、骨しかない状態、かろうじて生きていても、大やけどをし、皮膚がずるむけの状態で、「あつい、助けて」と川に向かってみんな歩いていて、男か女かも分からなかったそうです。たちまち川は、死の川と化しました。その後、しばらくすると黒い雨が降り始めました。放射能を含んだ死の雨です。雨に当たった人は髪が抜け、体中に黒い斑点が出て、次々に亡くなっていったそうです。

私はこの話を聞いたとき、あまりに衝撃的で信じられませんでした。しかし、原爆ドームや広島平和記念資料館に行き、現実起こったことなのだと理解しました。広島平和記念公園には、韓国の人達の慰霊碑もありました。原爆の被害者は日本人だけではないことを初めて知りました。

「戦争はいい事ですか？戦争をすることは正しいと思いますか？」と世界のどんな人にきいても、答えは「いいえ」でしょう。それなのになぜ、世界から戦争は消えないのでしょうか？

私は、今のこの世界から、国同士の争いや核兵器、戦争がなくなってほしいと強く思います。被爆者の方がおっしゃっていました。「自分一人だけが平和を熱心に考えても、世界は平和にならないのです。自分の平和への思いを友達や家族に話してください。そしてそれを世界に発信してください」と。私達には、醜い争いごとを無くせる力があるのです。みんなで協力して、世界の「平和」を造りましょう。



# 広島へ行って

牧中学校 3年 横尾 花菜

8月5日から7日の3日間、私は広島へ行き、6日に行われた広島平和記念式典へ参加してきました。

第二次世界大戦中に広島と長崎に落とされた原子爆弾、その一発でいったい何が起こったか説明できる人は、今の日本に何人いるのでしょうか。はがれた皮膚をぶらさげ、水を求めて歩き回る人々、行方が分からない家族への伝言を壊れかけの学校の壁に書き残した人、そして親や兄弟を亡くし、自分だけで生活していかなければならなくなったたくさんの子供たちの気持ちを、皆さんは1ミリでも想像できるのでしょうか。私たちの世代は、生まれてから一度も戦争を経験したことはありません。先の大戦により大きな被害を受けた日本は、平和のための法律を作ったからです。そのおかげで私たちは、戦争という悲劇をこの身で体験したことはありません。それ自体はいいことで、これからも続いてほしいことです。しかし、73年の年月が過ぎ、戦争と平和への関心が薄れているのもまた事実です。これはいいこととは言えません。

これからさらに年月が経ち、人々の記憶が風化し、広島と長崎の悲劇を絵空事のように考える人が増えた時、全世界を巻き込む核戦争が起きるのでしょうか。

広島平和記念式典の前日、私は自校で作られた千羽鶴を原爆の子の像に収めました。前日の夕方なのに、広島平和記念公園は人々の声でにぎやかでした。その中で、外国の方もちらほらと見えました。夕方とはいえ暑い中、写真を撮ったり、原爆の子の像を見たりしていました。日本人より広島の悲劇に胸を痛み、自ら進んで事実を知ろうとする方もいるのかもしれませんが。広島の原爆投下という歴史は、世界の歴史の大きな一部となっていると思います。

式典にも世界各国の人々が参加していました。中には戦争や紛争が起こっている国の人もいたでしょう。そういう人達も73年前の悲劇を知り、平和を感じたいと思い、日本に来たのだと思います。知識として知っただけでは、自分のものになったとは言えません。現地に行って見て、聞いて、触れてみて、本当に知った、自分の意識となったと言えます。

学校の授業や本、テレビなどで知る機会はたくさんありますが、もし機会があれば皆さんもぜひ広島へ行ってみてください。月に行って地球が青いと知るように、現地に行って気づくこともあるかと思います。

世界の歴史が人の記憶と同じものなら、日記をつけるように書き記していかなければなりません。今までに作られてきた戦争を題材にしたアニメや映画、本、そして絵。今でも作り続けられるそれらを見て、再確認しなければならないことが、私たちにはたくさんあります。こまめに確認しなければ忘れてしまう人間は、常に先人たちのつづった歴史を身近に感じていることが大切だと思います。

私たち、核という足かせをつけられた世代は、73年前の過ちを繰り返さないために、平和な世界への道筋を一步一步慎重に歩いていかなければなりません。

# 核なき世界へ

柿崎中学校 3年 柳澤 勇翔

1945年8月6日、午前8時15分。一瞬にして広島市民、数万人の命が奪われました。アメリカの爆撃機B29、通称「エノラ・ゲイ」によって原爆が落とされたからです。

4000℃の熱線、秒速440メートルの爆風、高熱の火炎、放射能、それらが複合され、一瞬にして直径4キロメートルもの範囲が全滅しました。

広島平和記念資料館で、原爆投下の瞬間を再現した映像を見た時、その恐ろしさに体が震えました。

第二次世界大戦中は、日本人は敵対するアメリカ人をひどく憎み、アメリカ人も同じように日本人をひどく憎んでいたと聞きます。憎しみ合いの中で戦争が泥沼化し、多くの兵士が亡くなりました。日本では、兵士でない民間人が、広島、長崎で原爆の被害に遭いました。世界に例のない惨劇です。

原爆投下から70年がたった2016年5月、オバマ前大統領が広島を訪れ、核なき世界へのメッセージを残しました。私が参加した今年の広島平和記念式典には、かつては憎しみ合っていた国からも、多くの人が訪れ、私たち日本人と同じ気持ちで、平和への祈りを捧げていました。

73年前は、憎しみ合っていた人々が、今は分かり合い、平和を求めることができるようになったのはなぜでしょうか。時間が自然に解決してくれたのでしょうか。私は違うと思います。広島や長崎で被害に遭った方々を始め、多くの人たちが、戦争と原爆を憎み、人を愛し、平和を求めて努力を続けてきたからだと思います。

式典で「平和への誓い」をした小学6年生の言葉を聞き、広島では本当の平和を求める思いが、こうやって受け継がれているのだと感じました。

世界には、今1万5千もの核兵器があるとされています。核なき世界が実現しない限り、地球に本当の平和が訪れたとは言えないと思います。

広島訪問の3日間を通して、たくさんのことを考えました。歴史を見つめ、広島に学び、戦争を憎み、平和を求めるこの思いをたくさんの人につなぎ、世界が平和に向かうことを祈っていきます。

# 広島平和記念式典に参加して

大潟町中学校 3年 内田 篤

私が、今回参加した広島平和記念式典や施設の見学で感じた事は、戦争の起きない平和な世界にする事が大切という事だ。

理由は、人間の生活を大きく変えるからである。広島で当時の様子を表した絵などを見て、戦争中の日本の様子や、原子爆弾が投下された時の広島の状況が段々と分かってきて、戦争は、人間の生活を大きく変えるとても恐ろしいものだと感じたからだ。日本全国に戦争に関する資料館はあるが、被爆した地である広島で戦争や原子爆弾について学ぶ事は、とても意義があると思う。

また、広島平和記念式典に参加して感じることもあった。

式典のスピーチの中で、

「ヒロシマを継続して語り伝えなければならない。」という話があった。

戦争の恐ろしさについて考える機会が無い今こそ、実際に広島に行って感じた事、学んだ事を他の人に伝えていく事が大事だと思う。

私は、今回の平和記念式典参加前に、一度広島に行ったことがある。その時、戦争の資料を見たり、被爆者の方からお話を聞いた。しかし、あまり時間がなく十分に資料を見たり話を聞いたりすることができなかった。

今回は、長い時間を使ってより深く戦争について考えることができた良い体験だった。さらに、普通ではなかなか見る機会の少ない、平和記念式典にも参加することができて、とても有意義な3日間だった。そして、この体験を周りの人に伝えられるように努力していきたい。

# 私が伝えたいこと

頸城中学校 3年 唐澤 良多

広島を訪れて2日目の朝、広島平和記念式典に参列しました。その時、私の目に飛び込んできたものは、国籍、宗教、人種を問わず、世界各国から集まったたくさんの方々です。“平和”を祈るために、遠いところからこんなにも大勢の人が広島に来てくれたことを思うと、すごく感動しました。

午前8時15分、平和の鐘が鳴り、黙とうが行われました。1分間、広島は静寂に包まれました。この時の私の心の中には、二つの感情がありました。

一つ目は悲哀感です。たった一発の原子爆弾によって、罪なき多くの命が奪われました。生き延びても、家族や仲間を失い孤独となった人や、後遺症で今も苦しんでいる人がいます。私は、こんなつらい経験をしたことがないので想像することができません。想像できないほどの苦しみだったと思います。それを思うと、悲しく、さみしくなりました。

しかし、それよりも強く私の心の中にあったのが二つ目の責任感です。今を生きる私たちが、もう二度と戦争を起こしてはならない、核兵器を廃絶しようと心に刻み、そこに向けて動き出さなければいけないという責任感を感じました。

私にできることは、限られています。私はまず、広島に行って学んだことや、感じたこと、思ったことを、私の友達や家族、知っている人たちに伝えていこうと思いました。そして、こう呼びかけます「一度広島を訪れて、実際に見て、聞いて、感じてください。」と。

私は、広島を訪れて、初めて感じるものがたくさんありました。言葉で私がどれだけ一生懸命伝えても、実際に体験して感じる方が、絶対に心に残ると思います。だから、まずは広島を実際に訪れて、戦争の悲惨さや平和の尊さなどを感じてほしい。

それが、広島平和記念式典派遣事業を通して強く心に刻んだ、私が伝えたいことです。

# 広島平和記念式典を通して

吉川中学校 3年 上野 頼生

8月5日から7日に、吉川中学校の代表として広島平和記念式典に参加しました。参加する前までは、広島については授業で習ったことしか知りませんでした。しかし、参加することになり、だんだん関心を抱くようになりました。

1日目、広島平和記念公園内にある「原爆の子の像」の前に折り鶴の献呈をし、日本全国・世界各地から届けられたたくさんの折り鶴を見ることができました。そこで、世界の人々の平和に対する思いを感じることができました。

2日目、平和記念公園内で記念式典、献花・献水慰霊式、ガイドツアーに参加しました。テレビではなく、実際に自分の目で見て迫力を感じました。公園内の像や石碑を見学し、犠牲になった方々のことを深く考えることができました。次に、広島平和記念資料館（東館）で、広島の歴史や原子爆弾投下までの経緯などを学びました。戦争に関する資料を見て、現代の平和のありがたさを感じました。また、袋町小学校平和資料館では、被害のすさまじさをあらためて感じることができました。いろいろな場所に飾られていた折り鶴の多さに平和への祈りを感じました。そして、元安川で行われた灯ろう流しにも参加しました。テレビで見るより参加されている方が多かったので、驚きました。最近は川や海の汚染問題に配慮し、禁止する自治体も増えているそうです。参加してみて私は、汚染問題を解決し、このような行事は戦争を知らない我々の世代が大切にしていかなければならないと思いました。

今回、広島平和記念式典に参加して、あらためて戦争の悲惨さ、平和の尊さなどを感じました。戦争によってこれまでに何万人の命が奪われたのでしょうか。私たちは戦争・平和について考える必要があると思いました。世界の完全非核化を目指して、私は何ができるのか考えていきたいです。中学生の時に広島で学んだことを、これからの人生で大切にしていきたいです。

# 核廃絶を目指して

中郷中学校 1年 林 真生

私は今回の広島派遣で広島平和記念資料館などを見学し、原爆の恐ろしさ、むごさに強い衝撃を受けました。そして「核兵器はこの地球から絶対無くさなければならない」と強く思いました。

一発の原子爆弾により広島は、今まで築いてきた街が壊れ、焼かれ、たくさんの人々が閃光を浴び、言葉では表せないような姿になり亡くなったのです。どんなにつらかったでしょう。被爆した人、広島のすべての人が、そこが自分たちの愛した街「広島」であることが信じられなかったと思います。

被爆したことで、体が自由に動かなくなった人、「被爆者だ」と周りが避けたり、何の根拠もないうわさ話をされ差別されたりした人たち。何の罪もない人の夢や未来への希望を奪い、その人の人権まで傷つけ苦しめた核兵器は、間違っても、何があっても使用してはいけない、作ってはいけない、保有してはいけないものだと思います。

世界で最初に原子爆弾が落とされ、そして世界でたった一つの被爆国である日本が、世界に訴えていくべきことは「核兵器廃絶」。このことを今回の広島派遣を通して確信しました。唯一の被爆国だからこそ訴えられる、他の国にはない説得力のある願いや言葉を日本は持っています。広島や長崎で起こったことを世界中の人々の心に届け、核兵器廃絶を訴える人が一人でも多くなること、そして世界から核兵器が無くなった時に消えると言われている広島平和記念公園の「平和の灯」が早く消えること、それが私の願いです。

そのために、私が望むことは、日本が核兵器禁止条約に参加することです。核保有国との関係は、あまり考えなくても良いのではないのでしょうか。一日も早く被爆者の方々の思いや願いを届けてほしいと思います。

袋町小学校平和資料館を見学した時、教え子や家族を探す伝言が校舎のかべに残っていました。私は互いを思いやる心に胸をうたれました。

戦争・核兵器が無くなって、世界中の人々皆が仲良くなり、国境もなくなり、地球一つが大きな思いやりにあふれる国になればいいなと思います。

私も核廃絶—平和な地球づくりに向けて、何かできることがないか、これから真剣に考えていきたいと思っています。

# 平和な未来のために

板倉中学校 3年 佐藤 結羽

73年前の8月6日、世界で初めて広島に原爆が投下されました。一瞬にして数万人もの命は奪われました。街の建物は破壊され、何もかもなくなってしまった広島。

「70年は草も木も生えてこないだろう。」と言われていたそうです。

今回、実際に広島を訪れてとても驚きました。生えてこないと言われていた草木はいたるところに生えていて、本当に原爆が投下されたとは思えないほどの発展をとげた、きれいな街でした。しかし、原爆ドームは鉄骨がむき出しで、壁が無い部分もあり、原爆の恐ろしさを物語っていました。

2日目に、広島平和記念式典に参列し、あらためて戦争や核兵器の怖さを知り、二度とこんなことを起こしてはいけなくと強く感じました。また、広島平和記念資料館を訪れ、その展示資料に大きな衝撃を受けました。ところどころが焼けてしまった服、原爆が投下された後に撮られた、水を求めて歩く人々や全身に火傷を負っている人々の写真など、当時の恐怖や悲慘さが伝わってきました。原爆で多くの方が亡くなりましたが、助かった人々も、食料もない、水もない、住む家もない、そして放射線の影響で病気にかかるなど、大変な毎日が続きました。そのせいで亡くなられた方々もたくさんいます。原爆は大切な人はもちろん、毎日の穏やかな暮らしすべてを奪ったのです。

戦争は二度と起こしてはいけません。なぜなら、たくさんの大切な命や人々の暮らしを奪ってしまうからです。誰も喜びません。今の平和な時代にいる私たちは、幸せに毎日を送れていることへの感謝の気持ちを忘れずに過ごしていかなければいけないと思いました。明日何が起こるかは、誰にもわかりません。ですから、私は一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。

最後に、今回広島に行って学んだこと、感じたことをずっと忘れず、たくさんの人々に伝えていきたいです。そして誰もが戦争の事実を知り、平和を願って行動する世界にしていきたいです。

## 現場で感じて学んだこと

清里中学校 2年 丸山 奈央

清里中学校の代表として広島平和記念式典に参加させていただきました。戦争が起こった現場で、私が実際に見たり、聞いたり、感じたことを皆さんに伝えます。

式典では、広島市長の平和宣言、広島市の小学生による平和への誓いから、現地の方々の切実な平和への願いを感じました。また、周りには外国から来られた方がたくさんいらっしゃって、とても驚きました。国内の様々な県から来られた方もいらっしゃいました。このことから、ヒロシマや原爆に関心をもっている方がこんなにもたくさんいるのだと嬉しくなりました。少しでも平和に近づいているのではないかと感じたからです。

次に、広島平和記念公園内をガイドツアーで見学しました。「平和の灯」は、この世界から核兵器がなくなる日まで消えません。「平和の灯」が消える日が早く来ることを願いながら、今生きている環境に感謝しながら生活しようと思います。また、公園に入ってすぐの所に原爆の子の像があります。この像は、原爆による白血病で亡くなった佐々木禎子さんの友人の皆さんが、全国から募金を募って建てました。ここに、平和への願いを込めた折り鶴が世界中から届けられています。その量は毎年約1千万羽、重さにして約10トンにもものぼるそうです。私もクラスのみんなや家族と一緒に折った千羽鶴を献呈しました。

その後、広島平和記念資料館も見学しました。被爆直後の写真やけがを負った方の写真を見て、言葉を失いました。今の私の生活からは、想像のできない世界だったからです。胸が苦しくなり、ますます平和への思いが強くなりました。

最後に行われた灯ろう流しでは、「全世界から格差がなくなりますように」、「世界が平和になって世界中のみんなが笑顔になりますように」、「みんながヒロシマやナガサキに関心を持ちますように」という三つの願いを込めて灯ろうを流しました。

この願いを叶えるために私にできることは、広島で感じて学んだことを学校の友達や家族に伝えて広げることだと思っています。戦後73年、戦争を体験した方々の平均年齢は80歳を超えています。戦争を体験した方々の思いや考えを私たちが受け継がなければなりません。そして、周りの人に感謝の気持ちを伝えたり、困っている人がいたら助けたり、友達と協力したり、小さなことでも笑顔が増えるように自分から積極的に行動していきます。



# 広島体験学習より

三和中学校 3年 高嶋 泰地

8月6日、午前8時15分。広島平和記念公園。その時、そこにいた全ての人が、動きを止めました。それまで感じていた周りの人の息遣いも、たくさんの人の足音も、近くを走る車の音さえも聞こえなくなりました。聞こえるのは蝉の声と、黙とうの合図である平和の鐘の音だけ。世界中から集まった全ての人が、原爆の犠牲になった方々のご冥福と、本当の意味で平和な世界が訪れることを願っていました。

73年前、広島と長崎に原子爆弾が投下されたことは、誰もが知っていることです。もちろん私も知っていました。しかし、どのような被害がどれくらいの範囲に及んだのかは、知りませんでした。

広島平和記念資料館で私が目にしたのは、想像を絶するものでした。ひどい火傷を負って皮膚が黒焦げになっている中学生の写真。原爆の熱線を浴びてぐにゃぐにゃに変形したガラス瓶。原爆が投下された時刻8時15分で止まった時計。廃墟と化した広島の街。どれも正視に耐えない悲惨なものでした。これほどの被害が、たった一発の爆弾によってもたらされたのか。その時、私は原爆の本当の恐ろしさに気付かされました。

また、袋町小学校平和資料館に行き、当時、被爆した人たちがはぐれた家族を探すための伝言を残す場として使われていたことを知りました。実際に学校の壁に書いてある伝言を見ることができました。それを見て私は、当時の状況を考えずにはいられませんでした。

原爆の被害を受けて、自分自身も生きるのに精一杯なのに、命がけで小学校に行き、はぐれてしまった家族がいてくれることを信じて、伝言を残した人々の思い。原爆が落とされてからの地獄のような日々。どちらも私の想像を超えるものでした。

原爆が落とされたら、70年は草木一本も生えてこないと言われていましたが、現地の方々は立ち上がり、復興作業を始めました。そして今日、広島はかつて原爆により廃墟と化したことが嘘のように、美しい街に生まれ変わっています。

でも、街が再建されても、被爆者の方々の記憶から、原爆の被害を受けた事実が消えることはありません。むしろ、その事実を後世に伝えていくべきだと活動をしています。それは、平和な未来を作るための活動。直接原爆の被害を受けた立場だからこそ、心の底から平和を願い、第二の広島を作ってはいけないことを訴えることができるのだと。それは叫びにも似た祈りでした。

私はきっと広島を訪れたこと、そしてそこで見聞きしたことを忘れはしないでしょう。そして、8月6日の広島平和記念式典の様子を見るたび、鮮明に思い出すことでしょう。来年も再来年もこれからずっと、あの平和記念公園には、世界中から大勢が集い、犠牲者のご冥福と恒久平和を祈るでしょう。私も祈ろう。被爆者の方々の声が、少しでも多くの人に届き、核兵器のない世界が作られることを。

# この世界に生まれて

名立中学校 3年 高宮 茉優

戦争が起きない今の日本。世界で唯一、核が落とされた被爆国、そしてヒロシマ。世の中は科学が進歩して、快適な暮らしができています。しかし、今回訪れた広島平和記念公園は違いました。そこだけ時間が止まった感じでした。原爆ドームが物語る当時の悲惨さ、原爆を落とされる目印となった相生橋、一瞬にして命を奪った原爆の恐ろしさを物語っているようでした。

1945年8月6日、午前8時15分。当たり前だった生活が一瞬にして奪われてしまったのです。みなさんは、今生きている当たり前の日々が突然変わったらどう思いますか。真っ先に思い浮かべる人は誰ですか。ずっと一緒だった家族や友人を引き離してしまう原爆。人々を苦しめる原爆が、まだ世の中にあることについて、私は疑問を感じています。

広島平和記念式典前に事前学習が行われ、被爆者の方のお話を聞きました。人体への影響、変わり果てた広島の姿。話を聞いているうちに、当時の世界に引き込まれたようでした。被爆者の方は苦しみながらも、後世に語り継ごうと努力している、その姿に心を打たれました。

また、広島市内の高校生が当時の様子を絵画で残しているという事を聞きました。現地で実際の絵を見てみると、ものすごく残酷で悲しくなりました。私たちと同じ年代の人たちが描いていると思うと、とても衝撃を受けました。

現地に行ったからこそ感じられる雰囲気。私は今回の経験を通して、平和への願いが強くなりました。それは人々が自然に笑顔になることです。自分だけではできないかもしれません。でも家族、友達が笑顔になれば、幸せな日々を過ごせると思います。

悲しみを乗り越え、今に生きる広島の人々の思いを、この時代に生まれた自分だからこそできる形で、つないでいきます。

# 平和になるために

上越教育大学附属中学校 2年 横尾 美々

広島平和記念式典や広島平和記念資料館など、平和を知るために訪れた場所には、多くの外国人がいた。正直、もっと日本人であふれていると思っていたので、外国人の多さにびっくりした。それだけ、外国人も日本で起こった悲劇に高い関心を持っていることが分かった。

式典は、日本語のみで進行していった。日本語が解らない方もいたであろう。しかし、皆メッセージに聞き入っていた。何かを必死に伝える時には、言語というものは大して障害にならないのかもしれないと思った。

現在、核保有国は世界全体で9か国。9か国の持っている核を全て爆発させると、人類は滅亡してしまう。一桁の国が保有している核の総数は約1万発。これを全て無くすのは非常に困難ではないだろうか。少しずつ減らしていき、最後の一つが無くなった時、世界に向けて「全ての核は無くなった。」と伝えてほしい。そして「我々は平和へと大きく近づいた。」と。

核が使用されていなくても、戦争は、常にどこかで起きている。しかし、まずは核の無い世界を目指し、皆が安心して笑顔で暮らせる平和な世界へと近づけるように、私達は子や孫にも、核の恐ろしさや戦争の悲劇を伝えていかななくてはいけない。

「日本には、核爆弾が落とされたんだよ。何十年も何十年も昔のことだけど、決して忘れてはいけないことだよ…。」と。

# 広島派遣を通じて考えたこと

直江津中等教育学校 2年 丸田 真

昭和20年8月6日8時15分、広島に原爆が投下されました。あれから73年経った今でも後遺症で苦しむ人々がおり、さらには被爆二世、三世と呼ばれる人々にも心身共に様々な苦しみを与え続けています。

広島に着き、目の前に広がる景色は、多くのビルや路面電車、活気ある街並み。

73年前に原爆が投下され、一瞬にして多くの命を奪い、一面赤と黒の世界になった現場と同じ場所なのか、そのギャップに驚きました。ただ、その街中にある原爆ドームは、あの日のことを忘れてはいけないと私たちに訴えかけ、平和な未来を築こうと強く願い、努力をした広島の人々の姿を想像させました。

広島平和記念資料館では、血のべっとりついたワンピース、変形したガラス瓶、8時15分で止まった時計などを見て衝撃をうけ、言葉を失いました。それらの遺品から、今までの自分の戦争や原爆、平和に対する考えがとてもぼんやりとあいまいだったことに気付かされ、反省しました。これらの遺品の訴えてくる力強いメッセージは、「二度とこのような惨劇を許してはならない。」ということです。また、国内外から5万人以上が参列した広島平和記念式典では、広島の人々の悲しみ、怒りなどが強く感じられました。こども代表による平和への誓いは私の心を打ち、原爆の恐ろしさを訴え、核兵器根絶へのとても強い思いを感じました。

被爆者や戦争経験者は年々減っています。近い将来、被爆者や戦争経験者の生の「力」のこもった声は聞くことが出来なくなってしまいます。そのような時代になるからこそ、一人でも多くの方が「ヒロシマ」の声に耳を傾け、「ヒロシマ」を知り、平和とは何かを考えていくことが重要です。今回の経験を通じて私が考える平和とは、争いごとがなく、希望を持てる未来を想像できることであり、そのためには皆が感謝の気持ちを持つことだと考えます。

私は、日々思いやりや感謝の気持ちを忘れずに、ヒロシマの心を世界に伝えていく一人になっていきたいです。

# 非核平和友好都市宣言

私たちの上越市は、美しい自然のなかに歴史や文化の息づく、薫り高いまちです。この郷土を大切に守り、生きがいのある豊かな社会を築いていくことが、今の私たち市民に課せられた使命だと思えます。

私たちは、これを根底からゆるがし、人類の平和と地球環境を脅かす核兵器の使用・実験は容認できません。世界唯一の被爆国の国民として、すべての国のあらゆる核兵器がすみやかに廃絶され、恒久平和が確立されることを強く願うものです。

そのためにも私たちは、この上越市から姉妹都市や国際交流の輪を広げ、世界の人々と友好のきずなを強めながら、互いの繁栄を図っていきます。

私たちの上越市は、戦後50年の節目にあたり、平和を求める決意を新たにし、ここに「非核平和友好都市」とすることを宣言します。

平成7年12月20日

上 越 市